DD NEWSLETTER

NO. 4

June 24,1983

The Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

［４－１］Don Daeng 調査打合わせ会

１９８３．６．１０（金）　ＰＭ３：００～６：００

於　京都大学農学部農林経済　宮崎研究室

出席者　宮崎，武邑，野間，舟橋（敬省略，順不同以下同じ）

＜テーマ＞　NSB Routine Survey用Ｑ票検討およびData in-put 方法について

１．NSB Routine Surveyに伴う基礎調査．農家経済調査．戸別調査に関する基本的合意事項

（１）自然系先発隊（海田，宮川，星川）によるNSB 調査の入手情報に依拠して、重要と思われる被調査農家を選定し、順次基礎調査を、武邑、宮崎、林が開始する。基礎調査用Ｑ票は武邑が作成ずみであり、現地にて、コピーする。

（２）基礎調査を終えた農家から順次、Ｄaily　Activity　Survey　を開始し、次第に戸数を増やして行く。そのＱ票については後記を参照。

（３）農家経済調査（宮崎）、戸別調査（舟橋）は、基本的には、NSB 内に水田を所有する農家を対象として実施し、自然系の調査とリンクできるようデータの収集に努める。ただし、NSB に水田を所有せずとも、当該地域内の水田を耕作する農家もあり得るので、このような場合には、対象農家の変更もしくは拡大もありうる。

２．NSB に関与する世帯のDaily Activity Survey について

（１）調査項目：　世帯員全員の１日の行動

（いつ、どこで、だれが、だれと、なにを、どうした）

（２）調査対象：　基本的には、NSB に水田を所有する世帯できれば、各社会階層を代表する世帯にまで拡張することもありうる。

（３）問題点：ａ．NSB に水田を所有する農家全戸に詳細な調査（D.A.Survey）を実施する必要があるか。

ｂ．６ヶ月間の長期に渡る記入に全世帯が耐えられるか。

ｃ．文字を容易に書ける世帯員がいるか否か。

ｄ．その他現地の状況に依存せざるを得ぬことも多々あろう。等々。

（４）調査実施方法：　上記の問題点を考慮して、Ｑ票は次の２種を準備する（前回全体打合わせ会での口羽案による）。

その１：詳細Ｑ票　調査対象世帯メンバー個個人の毎日の行動を詳細に記録するもの。世帯員自記式による。１世帯当り、Ｂ４　２～６枚のＱ票が必要。

その２：粗いＱ票　NSB 内での行動に限って記入してもらうもの。１世帯当りＢ４１枚のＱ票。

ただし、重要と思われる農家（自然系との打合わせにより選定）には、詳細Ｑ票をできる限り用いるもととし、その他の世帯に粗いＱ票を用いて、両者を同一世帯には並用しない。

（５）現地での調査（D.A.Survey）の進め方

ａ．２種のＱ票は、タイ文字に改め、印刷する。

ｂ．集められたDataは、現地でパソコンにin-putする。

ｃ．in-putのための基本的なコード票は野間によって既に作成されているが、調査結果を見ながら、順次新しい項目を追加し、コード化して行く。

ｄ．コード化は、パソコンへのin-putとの関係があるので、現地で星川と相談、検討し、実施する。

（文責、武邑）

［４－２］「［２－１］DD研究の狙うもの」に対する意見

＊海田　（６月４日付）

大枠としては大賛成。但し、構想は大変包括的なので、このメムバーでどこまで達成できるかが問題。第１、３、４、１１章のいわば大枠のセッティングに相当するとこ

ろが問題。どこまでデータを発掘できるか。この大枠を叩台にして、各人が各人の研究の位置づけを真剣に考える端緒を把むことはできようが、実際のレポートの中では、各人の直接の関心分野をもっと強く表に出すことも容認されるべきであろう。率直に言って、この枠組をそっくりレポートに反映させるには、我が研究チームはいささか力不足であろう。

結論として、チームメムバー内の議論の枠組を作ったことは大いに評価されるべき。但し、ここ１－３年の中に完成されるべき研究成果の中には、この構想の一部しか取込めないはずだし、それでもよしとする姿勢をチームメムバーに示さなくていけない。

＊辻井　（５月３１日付）

DDは経済的にはあまり周縁でない。その発展のパターンはmarginalではなくてむしろcoreに近い。バンコク近郊村タイプという感じがします。私のこの認識は６０年以降を考えているが、二重の周縁性の中の「前者」の周縁性のタイムスパンは必ずしもこれと合致しません。しかし、第III 部の開発を考えるときは、どうしても期間は２０～３０年ということになるから、これと「ラーオ社会の外延的拡大」という問題のタイムスパンとの研究戦略上の調整が必要ではないかと考えます。

「狙い」を読んで「開発」が正面に出ているので驚いた。以前、福井はそう言ってなかった。しかし、この修正は、私としては大歓迎である。その際、「開発」を考えること、そしてDDが必ずしも「周縁」ではないことに注意すべきだと思う。すなわち、DDの発展は、タイ国全体の農業、経済、農業政策、貿易と東北タイの農業、経済の変化、そしてDD村の農業経済というチェインを見なければならない。

農家が農民の行動調整の単位で、それがまた調査単位ですから、この視点をもっと強く出したら良いと考える。

米作の不安定性は重要である。この不安定と先に述べたcoreを中心とする経済発展とを軸として第II部をDD調査からできる範囲に縮小するかを考えねばならない。

私としては労働力の利用の側面に最も興味があり、過剰労働力の量を知るためDDのデータを利用できれば有難い。

発展を捕えるために成長と分配の両側面をはっきり意識した方がよいと思う。

［４－３］DD村近況　（海田発６／１５）

宿舎の用意は整ったとのことです。学生助手はKKU 農学部４年生５名が確定。内２名は女子学生。村人では、ポーマー、ケン、ディーの３人を常雇とし、料理はポーケンの娘、洗濯はポーマーの孫（女　１３、４才）と決まっているそうです。

６月６～１２日に８０mmの降雨あり。一時湛水田あるも、耕起はまだ。一部で苗代づくり始まる。

［４－４］医学関係者との協力

京大医学部衛生学教室の糸川嘉則教授を代表者とするグループが文部省科研費によって、タイ国農村の医学的調査を計画しております。昭和５８年度は予備調査、５９年度本調査の予定です。この調査の一環として、DD村の住民を対象とした調査を希望しています。また、単に対象村をDD村とするだけではなく、DD研究の一部に、医学調査がincorporate されることも考慮されています。

とりあえず、今年は同教室院生の翠川　裕君が１０月３日～１２月２６日の予定でDD村に来て、予備的調査と飲料水の調査をする予定です。また、この間、糸川教授らも短期間、来村する予定です。

［４－５］日程一部変更

須羽新二　　９月２６日～１月２３日

小池　聡　　１１月１日～１月２３日

石井米雄　　１月～２月頃

なお、須羽、小池両君が、舟橋氏（１月１５日）までの橋渡しをすることになるので、NSB 調査なども、この期間も継続し２月末まで行なうことも可能かも知れない。